

随筆



趣味

群星沖縄臨床研修センター
名誉センター長
宮城 征四郎

趣味の有る無しは、人生に取って極めて大切だと言われる。

趣味は、ぼけ防止にとっても可成り有効であるなどと識者は言う。

私も後期高齢者の仲間入りをする年になって、さて自分の趣味は一体何だろうと考えてみた。

30代ころの事であるが、10年間程は友人達と円卓を囲み、一心不乱に麻雀をした。

一時は雀士になろうかと思ひ、沢山の本を読みあさったこともある。しかし、それは40歳の声を聞くとともに止めた。止めるについては仲間達から非難轟々の声が上がったが、自分の一生の趣味とするには抵抗があった。

若い頃はスポーツとしてはバレーボールやボーリング、ゴーゴードダンス、卓球などを楽しんだ。

バレーボールは38歳から43歳迄の5年間を県立中部病院で9人制の職域競技として楽しみ、私は後えいのレフトを守って九州大会3連覇を果たした。

ボーリングにも一時はこって3個のマイボールを駆使してスコアーを伸ばし、沖縄県医師会代表チームの一員として各県医師会チーム対抗試合に出場したりした。

大学時代は卓球クラブに属したが、あまり物にはならなかった。

100メートル13秒2の俊足を生かしてクラブ対抗リレーに出場したりしたが、より俊足な同級生に追い越された苦い経験を以て終わっている。

ゴーゴードダンスは若い頃にデンマークへ1年間留学した際に、習い覚えたもので、その後、

沖縄に帰国してからも、パーティーの度に披露していた。

独自で覚えたペン画も花を画題として、中部病院時代に院内、院外で個展を開いたこともあり、それを見た者の感想文の中に「白黒の絵だけれども、その中に色が見える」と言うお言葉を頂いて感動したことを今でも鮮明に覚えている。

年2回の季節の挨拶状には自分で描いた花の絵を添える習慣がもう20年以上続いているし、公務員生活に終止符を打つ時の退官記念誌には、あちらこちらに自ら描いた花の絵をあしらって貰ったりした。

読書も嫌いな方ではない。

若い頃は作者を選んでその作品集を入手し、その多くを読みふけた。

中谷宇吉郎や寺田寅彦、中原中也、佐藤春夫、萩原朔太郎、高村光太郎、若山牧水らの随筆集から夏目漱石、有島武郎、武者小路実篤、室生犀星、島崎藤村らの小説など、枚挙に暇がないほどであるが、どちらかと言うと乱読気味であった。

学生時代には阿部次郎の「三太郎の日記」などにこったこともあって、男の美学、人間の美学を追究したこともあったし、河上肇や、小林多喜二、毛沢東全集など左翼文学を漁ったり、ゲーテやトルストイ、ツルゲーネフ、パールバック、シュタインベックやドストエフスキーなどの西洋文学に傾倒したこともある。

いわば、麻疹に罹患した青年期もあったと言うことである。

青壮年期にはブルタークの英雄伝やチボー家の人々、キューリー夫人伝、渡辺淳一の「遠い落日」などに懲り、作家では谷崎潤一郎、司馬遼太郎、吉村昭などに埋没したりした。

読書の傾向は私の社会的役割と無縁ではなく、青春時代には乱読傾向であったが、中部病院の管理者になる頃から、命を張って自分の藩を守り、あるいは領土の拡張に奔走した戦国武将達の生き様が参考になり、あらゆる藩主た

ちの物語に興味に移り、機会を見つけては書店で買い求め、あるいは直接出版元に連絡して入手したりした。同時に彼らが生きた証となる城跡を訪ねることを大きな喜びとする時期もあった。日本の城跡の大半は踏破したと思う。将来、御城考証士になろうかと思ったのはこのころの事である。

定年を迎え、県立病院を退き、10年前に家内を失ってから読書傾向に変化をきたし、より宗教的、哲学的な書物、特に死にまつわる内容の本を多く読む様になった。

バレーボールやボーリングは今では全くしていないが、縁あって新しく迎えた女房と共に毎日4-5kmの早朝のウォーキングを欠かしたことがない。これを趣味の一つに加える事が果たして妥当であるかどうかは分からない。

齢80歳に近づいた今日、自分自身の老いを

感じたこと、出来るだけそこから自らを遠ざけたいと言う意欲が毎朝の運動に駆り立てている事だけは確かである。

今日、出来たことを明日も出来る。明日出来る事が明後日も出来る。そう言う日めくりをできることこそが、老いを遠ざけることだと思っている。

運動を反復することによって、Natural Killer Cellが対内に増加してがん細胞を攻撃し、男性では前立腺癌、女性では乳がんの頻度を減少させ、男女ともに大腸がんその他の臓器のがんの発生が減少すると言う論文を読んで、愈々、反復運動の効用を知る所となった。

徒に馬齢を重ね、80歳近くに達した自分の今後の精神生活、そして生命予後が果たしてどうなるのか、興味深く客観的に見守りたいと思うこのごろである。

